

# 秋田県埋蔵文化財 発掘調査報告会

平成22年度発掘調査成果

平成23年5月8日（日） 午前10時～午後4時  
会場：秋田県生涯学習センター



にかほ市 家ノ浦遺跡 古銭出土

主催：秋田県教育委員会

主管：秋田県埋蔵文化財センター

## 平成22年度 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会実施要項

- 1 目的 秋田県教育委員会及び市町村教育委員会が実施した発掘調査の成果を広く県民にお知らせし、埋蔵文化財の保護について理解を深めていただくことを目的としています。
- 2 主催 秋田県教育委員会
- 3 主管 秋田県埋蔵文化財センター
- 4 期日 平成23年3月13日(日)
- 5 会場 秋田県生涯学習センター  
住所：〒010-0955 秋田県秋田市山王中島町1-1 電話：018-865-1171
- 6 日程
 

9:00～	開場、受付、展示公開、考古学体験教室
10:00～10:10	開会行事
10:10～10:30	世界遺産登録推進事業について
10:30～10:40	平成22年度県内発掘調査の概要
10:40～11:50	発掘調査遺跡の報告《下内野Ⅲ遺跡、白館跡、史跡檜山安東氏城館跡(大館跡)》
11:50～13:00	昼食休憩、展示公開、考古学体験教室
13:00～14:35	発掘調査遺跡の報告《黒沼下堤下館跡、家ノ浦遺跡、北檜岡中野遺跡、茂木屋敷跡》
14:35～14:55	秋田県甘肅省文化交流事業について
14:55～15:00	閉会行事
15:00～16:00	展示公開、考古学体験教室
16:00	展示公開終了
- 7 考古学体験教室  
体験内容：石器づくり体験、弓矢体験、顕微鏡観察、縄文土器観察・施文体験  
実施時間：9:00～16:00の間で随時体験できます。
- 8 参加 どなたでも自由に参加できます。参加申し込みは不要です。
- 9 入場料 無料です。資料も無料で配布します。
- 10 昼食 各自ご用意ください。会場内でも飲食できます。
- 11 その他 不明な点は、秋田県埋蔵文化財センター資料管理活用班  
(電話：0187-69-3331)までお問い合わせください。

### ◎報告と展示の内容

遺跡・事業	所在地	報告	写真 展示	遺物 展示	資料 頁
世界遺産登録推進事業		○	○		2
下内野Ⅲ遺跡 (鹿角市教育委員会)	鹿角市	○	○	○	6
白館跡	湯沢市	○	○	○	8
史跡檜山安東氏城館跡 (大館跡)	能代市	○	○		10
黒沼下堤下館跡	秋田市	○	○		12
家ノ浦遺跡	にかほ市	○	○	○	14
北檜岡中野遺跡	大仙市	○	○		16
茂木屋敷跡 (大館市教育委員会)	大館市	○	○	○	18
秋田県甘肅省文化交流事業		○	○		20
前田表遺跡	にかほ市		○	○	22
横枕遺跡	にかほ市		○		24
月見堂館跡	仙北市		○		26
史跡弘田柵跡	大仙市 美郷町		○		28
史跡脇本城跡 (男鹿市教育委員会)	男鹿市		○		30
史跡秋田城跡 (秋田市教育委員会)	秋田市		○		31
沖田Ⅰ遺跡 (大仙市教育委員会)	大仙市		○	○	32
谷地中遺跡 (美郷町教育委員会)	美郷町		○		33
陣館遺跡 (横手市教育委員会)	横手市		○		34

# 目 次

世界遺産登録推進事業…………… 2	横枕遺跡…………… 24
下内野Ⅲ遺跡…………… 6	月見堂館跡…………… 26
臼館跡…………… 8	史跡払田柵跡…………… 28
史跡檜山安東氏城館跡（大館跡）…………… 10	史跡脇本城跡…………… 30
黒沼下堤下館跡…………… 12	史跡秋田城跡…………… 31
家ノ浦遺跡…………… 14	沖田Ⅰ遺跡…………… 32
北檜岡中野遺跡…………… 16	谷地中遺跡…………… 33
茂木屋敷跡…………… 18	陣館遺跡…………… 34
秋田県甘肅省文化交流事業…………… 20	年表…………… 35
前田表遺跡…………… 22	発掘調査遺跡の位置図…………… 裏表紙

### 平成22年度県内発掘調査遺跡一覧表

No.	遺 跡 名	所 在 地	調査主体	調査面積	主な時代と性格
1	下内野Ⅱ遺跡	鹿角市十和田大湯字下内野	鹿角市教育委員会	150㎡	縄文：散布地
2	下内野Ⅲ遺跡	鹿角市十和田大湯字下内野	鹿角市教育委員会	150㎡	縄文：配石遺構群
3	柏崎館跡	鹿角市十和田毛馬内字柏崎	鹿角市教育委員会	400㎡	中世：城館跡
4	県史跡矢立庵寺跡	大館市白沢字松原	大館市教育委員会	43㎡	平安・中世：寺院跡
5	味噌内館下遺跡	大館市比内町味噌内字館下	大館市教育委員会	72㎡	平安：集落跡 近世：集落跡
6	茂木屋敷跡	大館市十二所字元館	大館市教育委員会	1,300㎡	近世：武家屋敷跡
7	史跡伊勢堂岱遺跡	北秋田市脇神字伊勢堂岱	北秋田市教育委員会	600㎡	縄文：祭祀跡
8	石倉岱遺跡	北秋田市七日市字石倉岱	北秋田市教育委員会	100㎡	縄文：祭祀跡
9	史跡檜山安東氏城館跡（大館跡）	能代市田床内字大館	秋田県教育委員会	132㎡	平安：集落跡
10	下大野Ⅰ遺跡	能代市落合字下大野	能代市教育委員会	400㎡	縄文：散布地 平安：散布地
11	史跡脇本城跡	男鹿市脇本脇本字内ヶ崎	男鹿市教育委員会	153㎡	中世：城館跡
12	史跡秋田城跡	秋田市寺内焼山、寺内大小路	秋田市教育委員会	770㎡	奈良・平安：城柵官衙
13	史跡地蔵田遺跡	秋田市御所野地蔵田	秋田市教育委員会	2㎡	旧石器・縄文・弥生：集落跡
14	黒沼下堤下館跡	秋田市河辺北野田高屋字黒沼下堤下	秋田県教育委員会	4,650㎡	平安：集落跡 近世：墓地
15	前田表遺跡	にかほ市両前寺字前田表	秋田県教育委員会	1,100㎡	平安：集落跡
16	家ノ浦遺跡	にかほ市両前寺字家ノ浦	秋田県教育委員会	2,000㎡	平安：集落跡 中世：集落跡
17	横枕遺跡	にかほ市平沢字横枕	秋田県教育委員会	6,200㎡	平安：集落跡
18	月見堂館跡	仙北市角館町雲然字山口	秋田県教育委員会	1,500㎡	縄文：配石遺構 中世：城館跡
19	北檜岡中野遺跡	大仙市北檜岡字中野	秋田県教育委員会	8,900㎡	中世：集落跡
20	沖田Ⅱ遺跡	大仙市北檜岡字沖田	大仙市教育委員会	700㎡	近世：集落跡
21	沖田Ⅰ遺跡	大仙市北檜岡字沖田	大仙市教育委員会	6,000㎡	近世：集落跡
22	史跡払田柵跡	大仙市払田字仲谷地	秋田県教育委員会	188㎡	平安：城柵官衙
23	県史跡本堂城跡	美郷町本堂城回字館間	美郷町教育委員会	230㎡	中世：城館跡
24	谷地中遺跡	美郷町羽貫谷地字谷地中	美郷町教育委員会	2,300㎡	平安：集落跡
25	湯殿屋敷遺跡	美郷町羽貫谷地字湯殿屋敷	美郷町教育委員会	1,900㎡	平安：集落跡
26	陣館遺跡	横手市金沢中野字根小屋	横手市教育委員会	250㎡	平安：城館跡
27	宮田館跡	横手市大雄字田町	横手市教育委員会	1,135㎡	中世：城館跡
28	島田遺跡	横手市大雄字島田	横手市教育委員会	488㎡	縄文：集落跡
29	臼館跡	湯沢市下院内字焼山	秋田県教育委員会	5,600㎡	縄文：集落跡
30	菅生田掬遺跡	東成瀬村田子内字菅生田掬	東成瀬村教育委員会	70㎡	縄文：集落跡
31	上掬遺跡	東成瀬村田子内字上掬	東成瀬村教育委員会	100㎡	縄文：集落跡

（太字は報告遺跡・事業、番号は裏表紙の位置図に対応します。）

# 世界遺産登録推進事業

## 世界遺産登録を目指す

### 「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」

「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」は、平成21年1月5日付けでユネスコ世界遺産暫定一覧表に記載された、日本の世界遺産候補のひとつです。秋田県と北海道、青森県、岩手県および構成資産の遺跡を保有する12市町が共同で提案しており、平成27（2015）年のユネスコ世界遺産委員会での本登録を目指して推進事業に取り組んでいます。

縄文遺跡群は、秋田県の2遺跡のほか北海道の4遺跡、青森県の8遺跡、岩手県の1遺跡の合計15遺跡で構成されています。いずれも国が指定する特別史跡、史跡あるいは史跡を目指している遺跡であり、国内ではその価値が十分に認められています。

**資産構成**

秋田県：●大湯環状列石、●伊勢堂岱遺跡  
北海道：●鷺ノ木遺跡、◆北黄金貝塚、◆入江・高砂貝塚、■大船遺跡  
青森県：●小牧野遺跡、■三内丸山遺跡、▲是川石器時代遺跡、  
▲亀ヶ岡石器時代遺跡、◆二ツ森貝塚、◆長七谷地貝塚、  
◆田小屋野貝塚、★大平山元Ⅰ遺跡  
岩手県：■御所野遺跡

(●：環状列石 ■：集落 ◆：貝塚 ▲：低湿地遺跡 ★：散布地)

秋田県の2遺跡は、鹿角市の特別史跡大湯環状列石と北秋田市の史跡伊勢堂岱遺跡です。大湯環状列石は、直径52mの万座環状列石、44mの野中堂環状列石の2つ、伊勢堂岱遺跡は、直径15～45mを測るA、B、C、Dの4つの環状列石をもつ遺跡です。北海道の鷺ノ木遺跡、青森県の小牧野遺跡も環状列石のある遺跡ですが、1遺跡で複数の環状列石があるのは、全国でも大湯環状列石と伊勢堂岱遺跡の2つだけです。

環状列石は、なんのために造られたのでしょうか。

主な説として、「墳墓説」と「祭祀場説」があります。「墳墓説」は、その名のとおり環状列石をお墓とみる考え方で、列石は墓標の集合体と考えます。「祭祀場説」は、環状列石を舞台に様々なマツリや儀式を行ったと考えます。また、天体との関係も注目されています。たとえば、大湯環状列石では、万座、野中堂の環状列石の中心と2つの日時計状配石遺構が、夏至の日没地点と一直線に並ぶことがわかっています。

## 世界遺産登録までの流れ

- 1 ユネスコの世界遺産暫定リストに登録・・・平成21年1月5日
- 2 国の決める本登録候補になる・・・・・・・・・・①推薦書案の提出  
↓ ②日本政府による決定が必要（平成25年度）
- 3 ユネスコの世界遺産会議で本登録・・・・・・・・①イコモス現地調査  
②イコモス勧告  
③世界遺産会議における採択（平成27年目標）

※イコモス（ICOMOS）は、国際記念物遺跡会議（International Council on Monuments and Sites）の略称です。文化財や遺跡の国際的な専門家団体です。

※2の②は、国の省庁連絡会議で決定されて、正式に日本の推薦遺産になります。

※3の①は、推薦書に書いてあることが本当かどうかを確認するためにイコモスの調査員が現地に赴いて行きます。

※3の②は、審査遺産に対するイコモスの評価です。

## 世界遺産登録のための具体的な作業

### A：推薦書案の作成

秋田県及び北海道、青森県、岩手県や関係市町が共同で、ユネスコに提出する推薦書を作成していきます。この作業を円滑に行うため、推進本部を設置し、専門家委員会からの意見を得ながら作業を進めています。

**推進本部：**県の知事や教育長、市町の長や教育長      **推進会議：**県と市町の担当課長等

**ワーキンググループ：**県と市町の担当職員      **専門家委員会：**考古学、環境学、世界遺産の専門家

### B：構成資産の普及

構成資産である個々の縄文遺跡は「埋蔵文化財」であり、国民共有の財産です。

これは、一部の人だけで守れるものではありません。このため、世界遺産登録推進にあわせて、各構成資産の魅力を再確認して国内外に広く普及していきます。

#### 四道県の国際的合意形成促進事業

##### ①海外専門家招聘

オランダのライデン大学ウィレムス教授  
に大湯環状列石、三内丸山遺跡の視察

##### ②フランスでの縄文文化の紹介

ユネスコ日本代表部、フランス国立考古学博物館  
パリ日本文化会館での縄文文化説明会の開催



パリ ユネスコ本部前にて

## 秋田県の普及事業 平成22年度世界遺産登録推進—縄文ルネサンス—事業

### ①世界遺産登録推進フォーラム「ストーンサークルのやくわり」

日時：平成22年9月19日（日）

場所：北秋田市文化会館

内容

ストーンサークルの有力な説のひとつである「祭祀場説」を今日的に確認することを目的として、専門家による講演や事例報告を行いました。國學院大学の小林達雄名誉教授からは、ストーンサークルが仲間どうしの絆<sup>きずな</sup>をつくり、先祖から子孫へとつなぐ精神文化のよりどころであったとする考え方が示されました。



パネルディスカッションの様子

### ②世界遺産登録推進展示会「秋田の土偶」展—縄文の記憶—

会期：平成22年10月20日（水）

～11月10日（水）

場所：北秋田市文化会館

内容

秋田県内の縄文遺跡から出土した土偶187点を展示しました。22日間の期間中、県内外から2,000人の来場者がありました。



展示会のチラシ

### ③マグネットシート・シールの作成

内容

大湯環状列石と伊勢堂岱遺跡のストーンサークルに関連した写真を印刷したマグネットシートを作成して、公用車などに貼付して世界遺産登録推進事業をPRしました。また、土偶などのイラストを印刷したシールを作成して、フォーラムの参加者等に配布しました。

### ④クリアファイルの作成・配布

内容

ストーンサークルに関連した写真やQ&A等を掲載したクリアファイルを作成して、新年度早々に全県の中学1年生に配布します。



大湯環状列石



伊勢堂岱遺跡

下内野Ⅲ遺跡は、鹿角市の北東部、大湯温泉郷を見下ろす黒森山くろもりやまの山すそに広がる標高220mの平地にあります。昭和58年の発見当時から石が確認され、特別史跡大湯環状列石おお ゆ かんじょうれつせきからも3kmの距離ということから、環状列石と関連のある遺跡の可能性が高いと考えられていました。今回、大湯環状列石に  
関連のある遺跡の発見を目的として、遺跡発見以来初めての発掘調査が行われました(①)。



調査の結果、2基の環状配石遺構かんじょうはいせき いこうと、3基の配石遺構が検出されました。また、調査区の全域から縄文土器破片や石器、土製品などが出土しています。

環状配石遺構はいずれも調査区のほぼ中央で見つかりました。第1号環状配石遺構(②)は、細長い石の長軸を組み合わせて形を造っています。今回は環状配石遺構の半分の石を出すだけでしたが、ハンドボーリングにより長軸約8m、短軸約6mの楕円形になると考えられます。

第2号環状配石遺構は、第1号環状配石遺構の西側に造られており、部分的に途切れているものの径約4mの円形となることが分かっています。



大湯環状列石の中心となる2つの環状列石は、多くのお墓が集まって円形を作ったものでしたが、今回見つかった環状配石遺構では、今のところどちらにもお墓のような石の集まりは見られていません。

調査区の北東では、3基の配石遺構が見つかりました(③④)。

今回は下部の調査は行っていませんが、下に穴を掘った跡と思われるような黒土が楕円形状に確認されています。配石遺構の石の近くからは、キノコ形土製品が見つっています。キノコ形土製品は、大湯環状列石からも出土していて、祭祀に使われた道具と考えられています。

今回検出された配石遺構に使用された石は、大半が石英閃緑玢岩せきえいせんりょくひんがんという種類の石でした。これは、大湯環状列石で使用された石と同じもので、下内野Ⅲ遺跡の下を流れる大湯川の上流にある安久谷川あくやから採取されることがわかっています。今回の調査では、遺跡の南東側から1mを超える大きさの石英閃緑玢岩も見つっています(⑤)。これだけ大きな石が見られるのは、安久谷川でもかなり上流に限られます。



大湯環状列石でもこの石にこだわり、採取地から大湯環状列石まで約7kmの距離を運んだと考えられていますが、縄文人たちの緑色の石へのこだわりと同じものを下内野Ⅲ遺跡からも感じることができます。

今回の調査では、大湯環状列石の周辺でも、配石遺構が作られていたことがわかりました。試掘調査ということで、遺構の有無などの確認で終了したため、今はわか

らない部分も多いですが、来年度、追調査を行い、検出された配石遺構がどういう形をしているのか、さらに、下にお墓はあるのか、遺構に伴う土器などの遺物などについても詳しく調査する予定です。

(鹿角市教育委員会)

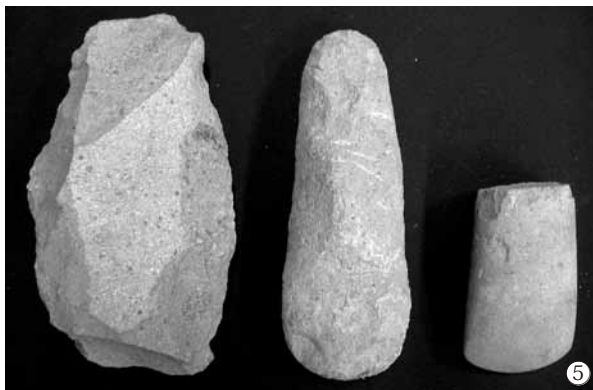
白館跡は、J R奥羽本線院内駅から東約1 kmの下院内地区にあり、雄物川とその支流おおつきさわがわ大槻沢川の合流点近くの丘陵地に立地しています(①)。丘陵の頂上には南北に連なる曲輪くるわが現況の地形でも確認できることから、これまで中世の城跡と考えられてきました。今回の調査区は、遺跡の東端、標高176～193mの丘陵裾部に当たります。調査の結果、はっきりとした中世の遺構は見つかりませんが、縄文時代前期、後期、晩期の遺物とともに、たてあな竪穴建物跡、ほったてばしら掘立柱建物跡、どこう土坑、フラスコ状土坑などの遺構が見つかりました。



調査区の地形は、その大部分が東に向かって下る急な斜面となっていますが、中央部には沢が入り込み、沢に沿って幅の狭い平坦面が北東に延びています。この狭い平坦面で、縄文時代前期と考えられる竪穴建物跡が1棟検出されました(②)。後世に半分ほど削られています。本来は直径3mほどの円形であったと推定されます。竪穴建物跡の中に炉は見つかりませんが、屋根を支えるための柱を据えた柱穴が確認できることから、縄文人の住まいと考えられます。平坦面から斜面にかけては、底が広く口のすぼまったフラスコ状土坑が検出されており(③)、これらは食料などを貯えるための貯蔵穴であったと推測されます。



平坦面沿いの沢では縄文時代の土器や石器が多量に出土しています。出土した土器の大半は縄文時代前期のもので、この時期に遺跡が活発に利用されていたことを示しています(④)。遺物の中で特に注目されるのが磨製石斧の未製品です(⑤)。これらは材料を加工して完成品まで作り上げる途中段階のもので、白館跡では磨き上げる前の打ち割り工程の石器が数多く見つかっています。その加工の程度は、石の周辺を粗く打ち欠いただけのものから細かく丁寧に割ったものまで様々あり、中には全体の形が完成品の磨製石斧と良く似たものもあります。しかし、これらは部分的に厚みが残っていたり、歪んでいたりと、折れたりしているため、最終的な磨き上げまで至らなかった失敗品と考えられます。磨製石斧の完成品は少なく、うまくできたものは遺跡の外に持ち出されたのでしょう。そのほか、石鏃や石匙などの材料となる剥片とその原石が詰め込まれた土坑も1基検出されています(⑥)。白館跡の縄文人たちが石器作りと深く関わりながら暮らしていたことがうかがわれます。

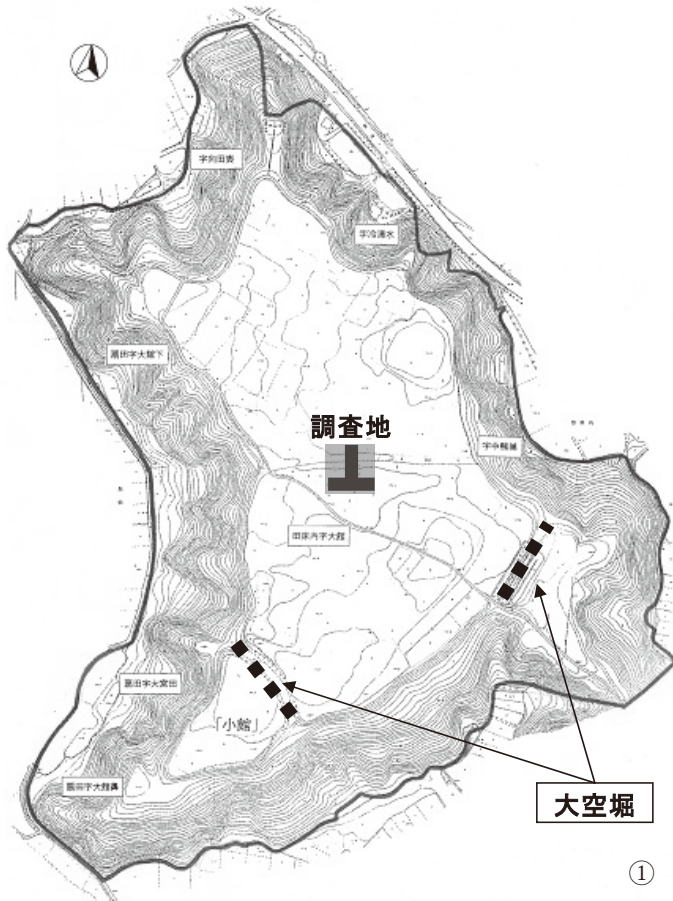


平坦面では縄文時代前期のほかに、後期、晩期の遺構と遺物もわずかに確認されています。掘立柱建物跡は6本の柱が亀甲形に並んだもので、1棟のみ検出されています(⑦)。柱穴から遺物が出土していないので詳しい時期は分かりませんが、秋田県内の縄文時代後期、晩期の遺跡で発見される建物跡と柱の並び方が似ています。掘立柱建物跡と同じ場所にある土坑の中からは、完形に近い後期中ごろの土器が出土しました(⑧)。土器の上は大きく平らな石で塞がれており、お墓と考えられます。

今回の調査地点は、縄文時代前期、後期、晩期にわたって断続的に利用されていたことが分かりました。特に磨製石斧の製作地と推定される遺跡は非常に少なく、貴重な成果と言えるでしょう。



秋田県教育委員会では、市町村教育委員会と連携しながら史跡等の保護を図り、その範囲や性格を確認することを目的として、平成21年度から「秋田県重要遺跡調査事業」を実施しています。2か年目の平成22年度は、能代市所在の史跡檜山安東氏城館跡（檜山城跡・大館跡・茶臼館跡）のうち、学校移転計画に伴い昭和46～51年に内容確認調査が行われた大館跡を対象とし、台地上の平安時代集落跡と土塁、空堀等の詳細について、弘田柵跡調査事務所が担当して調査することにしました。



今回の調査地は、平安時代集落が広がる台地上の平坦部のうち、台地中央を横断する土塁、空堀の周辺です。当初の予定では、台地南東部を区画する大空堀周辺、及び柵列が巡る台地北側縁辺も調査予定としていましたが、初めに着手した地区で重複する竪穴建物跡と土塁、空堀が良好な状態で確認されたため、以後ここに絞って調査を進めることにしました（①）。出土した土器の大半は土師器で、須恵器は壺甕類のみ40点弱、また擦文土器が一定量出土しました。

2棟確認した竪穴建物跡のうち、古い竪穴建物跡は全容を把握できませんでしたが、内部で鍛冶炉を確認したため、鍛冶工房と思われます。また鍛冶炉周辺には軽石で作られたレンガ状の作業台（埴）の破片が集積していました。重複する新しい竪穴建物跡は輪郭が10m×8mの

大型長方形で、壁から1mほど内側に板壁が巡る形態となっていました。埋土からは鉄製品や鉄滓が出土し、ごく近接してフィゴの羽口も出土したことから、これもまた鍛冶工房である可能性が高いと思われます。

竪穴建物跡などの遺構が掘り込まれている地層は、厚さ30cm程度の遺物包含層となっており、新しい竪穴建物跡は地層の上面近く、古い竪穴建物跡はその下面近くから掘り込まれていましたが、連続的に堆積していたため、複数の遺構確認面（文化面）としてはとらえられませんでした。この遺物包含層の上半部や上位の層からは擦文土器が出土しました。擦文土器は平安時代に北海道の道央、道南部を中心として使用された土器ですが、さまざまな交流を通じて東北部にも伝わり、10～11世紀代には秋田県の米代川流域を南限に分布するようになりました。能代市内の遺跡でも複数出土しています。

台地中央を横断する土塁は、並行する空堀の掘り上げ土を用いて構築されています。掘り上げ土は

平安時代の遺物包含層の上面を覆い、堀の南側のみに盛土されていました。そのため堀の北側では平安時代の包含層の上を近世以降の耕作土、表土が直接覆っていました。また、土塁上部は開墾により削平を受けていたため、幅5m、高さ0.8mが残っている現況となっています。空堀は現況で開口部幅6.25m、深

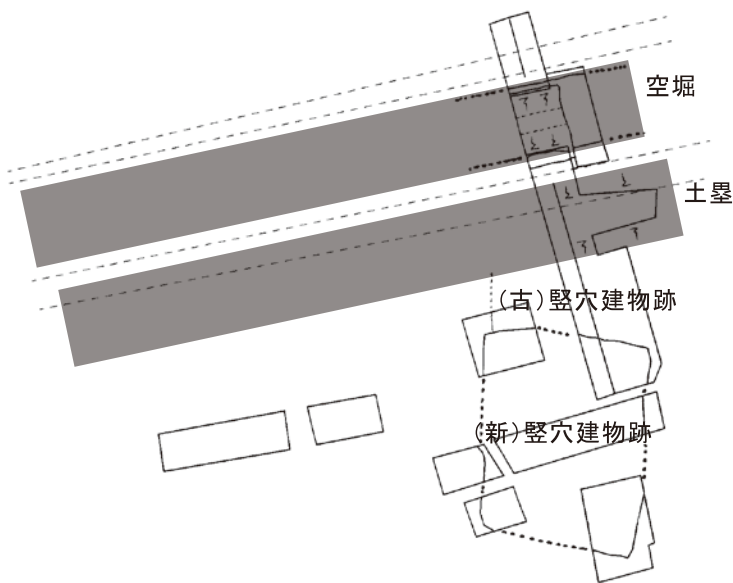


さ1.9mの逆台形状に掘り込まれ、堀底の中軸線に沿って凹んだ幅50cm×深さ20cmほどの範囲には礫群が配されており、堀底道と考えられます(②)。精査した延長2.8mほどの範囲に50点余りの礫が带状に並び、その中には2点の須恵器大甕破片、及び1点の砥石破片も含まれていました。この砥石破片は、新しい竪穴建物跡の直上で出土した砥石破片と接合しました。

今回の調査成果としては、平安時代包含層の直上に、土塁の構築土が盛土され、平安時代包含層の上半部や土塁構築土の最下層から擦文土器が出土することが確認できました。また新しい竪穴建物跡の上面(平安時代包含層の上面)出土の砥石破片が、空堀底面の礫群内の砥石破片と接合したことから、これら台地中央を横断する土塁、空堀が、平安時代の後期に構築された可能性が出てきました。そのため、以前の調査で出土した能代市教育委員会所蔵の遺物を再検討したところ、一定量の擦文土器が含まれていることが確認できました。その中には竪穴建物跡から土師器と擦文土器が共伴して出

土した一括遺物も見つかり、大館跡の集落がこの時期まで継続する可能性が極めて高くなりました。

今回の調査区の状況からは、土塁、空堀の確実な構築時期を断定することまでは出来ませんが、前記した調査所見より、台地中央を横断する土塁、空堀が10世紀後半～11世紀代に構築された可能性が新たに想定できるようになりました。



遺構配置略図

黒沼下堤下館跡は、JR奥羽本線和田駅の北東約400m、雄物川支流である岩見川北岸の丘陵上に立地します。遺跡の範囲は、調査地区の南西側に連なる和田公園のある丘陵部を含む4万㎡ほどと想定していますが、昭和38年に開通した国道13号により調査区側と和田公園側は分断された形となっています。

調査区は遺跡のほぼ中央、国道の北側にあたり、東西2つの小さな丘陵とその間の沢部からなります。標高は西側丘陵部が最も高く頂部で約46m、東側丘陵頂部では約43m、中央の沢部で約35mです。国道の通っている沖積地面の標高は約21mですので、西側丘陵頂部との高低差は約25mになります。西側丘陵部の2つの斜面（東向き=①、西向き=秋田市街地寄り）には、5～6段の階段状の人工地形（段築）が認められることから、これが中世城館跡の帯曲輪である可能性が高いものとして調査に



入りました。

その結果、中世（鎌倉時代～戦国時代）に特定される遺構、遺物は一切確認されず、縄文時代前期・後期の土器、石器、古代（平安時代、10世紀後半～11世紀）の竪穴建物跡、柱列、近世の土坑墓、時期不明の土坑、配石遺構などが見つかりました。ここでは古代と近世の遺構、遺物について紹介します。

【古代】検出された古代の遺構は、西側丘陵部から竪穴建物跡3棟と柱列、中央の沢に面した東側丘陵部最下位に位置する竪穴建物跡1棟です。西側丘陵部の遺構は、頂部平坦面とここから東側に一段下る平坦面から確認されています。頂部では2棟の竪穴建物跡が軸線方向をそろえて約5mの間隔をおいて見つかりました。その大きさは一辺が3.5～4.0m程の方形です。1棟は南側の壁面にカマドが設置され（②）、もう1棟は床面上に地床炉があります。前者のカマド周辺からは炭化米が出土し、後者の地床炉周辺からは鉄滓やフィゴの羽口が発見されました。このことから前者は住居、後者は鍛冶工房であったと考えられます。

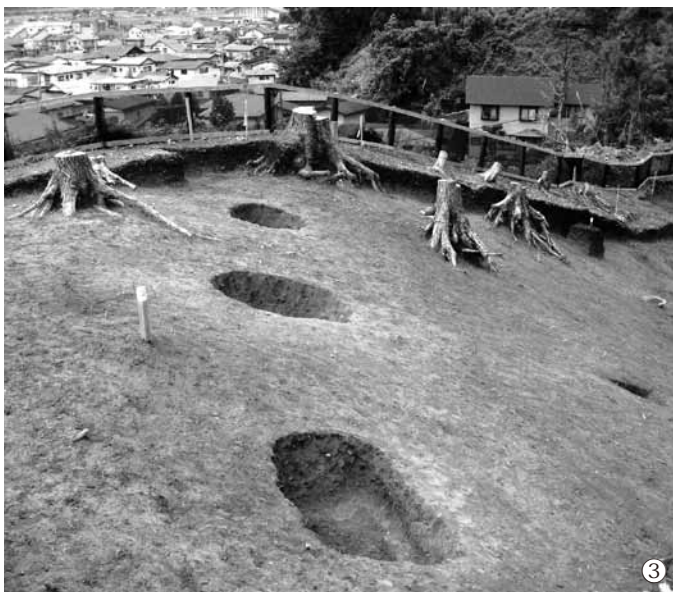
頂部から一段下がる帯曲輪状の平坦面には、一辺5.5m程の竪穴建物跡と柱列が確認されました。以上の3棟は出土遺物に土師器が含まれており、古代に構築された竪穴であることが分かります。

一般的に帯曲輪状の施設は、中世城館に伴う造作とされますが、今回の調査では、少なくとも頂部直下の段築については古代に造られた可能性が高いと言えます。ただし段築は、調査区外を含む西側丘陵部全域と和田公園側の丘陵斜面部でも確認されることからすれば、全てが古代に造られたかについては、慎重に検討していく必要があります。それでも古代における造成の可能性を示した根拠には、本遺跡の西約3.5kmに位置する虚空蔵大台滝遺跡（秋田市河辺豊成）の存在があります。同遺跡は、



現在でも大規模な土塁、空堀が残されていることから、中世の城館跡として調査された遺跡です。ところが発掘の結果、土塁、空堀や人工的に造られた急斜面（切岸）が11世紀代に造られたことが判明し、いわば中世の山城に匹敵する城館が古代末に存在していたことが確かめられました。山城のような要塞を造った主については、遺跡が11世紀末以降に存続しないこ

とから、後三年合戦（1083～87）で滅びることになる清原氏あるいは同氏に連なる一族の城館と推測されます。黒沼下堤下館跡は、虚空蔵大台滝遺跡に先行する10世紀後半～11世紀の鍛冶を生業とする集落跡です。10世紀後半とは秋田城、<sup>ほったのさく</sup>私田柵の古代城柵がその機能を停止し、替わって清原氏など有力豪族が台頭する時期に重なります。秋田平野南部の地において丘陵頂部にこのような集落を形成したのはなぜか、清原氏や虚空蔵大台滝遺跡などとの関係はあるのか、今後解明しなければならない大きな課題もあります。いずれにしても、秋田平野の南側、<sup>いわみかわ</sup>岩見川流域のこの一帯が古代末の歴史を語る上で重要な地域であることを再確認できたことは大きな成果です。



【近世】東側丘陵部には西側と異なり、帯曲輪状の施設は一切認められません。ここでは6基の土坑墓が見つかりました。6基全てから江戸時代に国内で<sup>ちゆうぞう</sup>鑄造された<sup>かんえい</sup>寛永通寶が出土したこと、3基から土葬された人骨が発見されたことから、近世の土坑墓であることが分かりました。

土坑墓は丘陵頂部から西側にやや下った位置で3基（③、北西方向から撮影、右奥の林が和田公園のある丘陵部）と同丘陵最下位での3基です。いずれも等高線に沿うように4～6mの間隔で3基ずつ並んでい

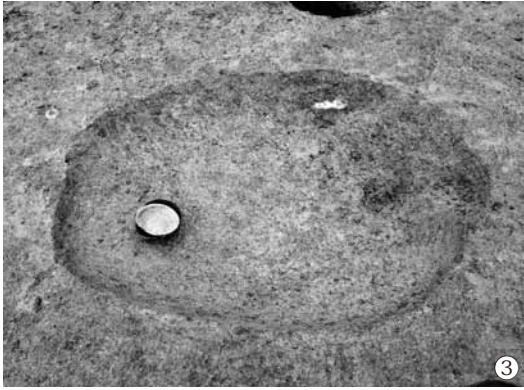
ました。土坑墓は一辺が1.2～1.4m程の楕円形や隅丸長方形です。人骨は丘陵頂部下の3基から発見されました。土坑の規模や頭蓋骨の位置から推測すれば、3基とも屈葬で北西（③手前）、南西（③中央）、南東（③奥）側に頭が位置するように埋葬されており、統一は認められません。副葬された寛永通寶は1基あたり3枚から9枚出土しています。また1基からは釘と見られる鉄製品が3点出土しており、<sup>もつかん</sup>木棺に用いられた可能性もあります。人骨は現在分析中ですので、性別、年齢、推定される身長などの情報はこれから明らかになるはずで

家ノ浦遺跡はJR羽越本線仁賀保駅の北東約1.2km、日本海から約0.6km東にあり、国道7号線の東側に隣接する標高28～36mの丘陵上（仁賀保高原北西端）に位置します。この丘陵は西流する阿部堂川と両前寺川によって断ち切られており、丘陵に沿って南北に走る昭和35年に開通した国道7号線の建設工事による削平以前には西側に舌状に延びていました。遺跡の周辺には、同じ丘陵上の北に隣接して前田表遺跡、東に阿部館遺跡、南側の低地部には家ノ浦Ⅱ遺跡、両前寺川をはさんで南西側には横枕遺跡、国道をはさんだ低地部の北西側には前田表Ⅱ遺跡、南西部には立沢遺跡など多くの遺跡があります。遺跡のうち、前田表Ⅱ遺跡と立沢遺跡は発掘調査が行われ、平安時代を中心とした集落遺跡であることが分かっています。これらの遺跡は字名から別々の遺跡として命名されていますが、当時は一連のムラであった可能性があります。また、遺跡に隣接する北東側に天永2（1111）年創建と伝えられる香取神社があります（①）。



調査の結果、平安～室町時代の掘立柱建物跡5棟、竪穴建物跡2棟、井戸跡2基、土坑37基、溝跡13条、柱穴様ピット1,548基の遺構が検出されました。調査区中央付近の掘立柱建物跡は桁行方向がほぼ真東－真西を示す桁行2間（5.4m）×梁行2間（5.2m）ほどの大きさがありました。この建物跡の直径約46cm、深さ約58cmに掘られた柱穴に角柱（②）が残存し、放射性炭素年代測定の結果から平安時代後半のものと推定されます。





土坑からは土師器<sup>はじきつき</sup>環が2個重ねられた状態で出土しました(③)。その周囲にある同じような浅い土坑からも完形の土師器環、皿が出土していますので、何らかの意図を持って残置したものと考えられます。古代の出土遺物は須恵器<sup>すえき</sup>が少なく、土師器環、甕<sup>かめ</sup>が多く出土しています。特に調査区南側の生活面からは律令国家の役人がベルトのように身につけた石帯<sup>せきたい</sup>の一部である丸鞆<sup>まるども</sup>(④)や律令国家の官職名である「中將」と記載

された木簡<sup>もっかん</sup>(⑤)が出土しました。その形状(残存長4×幅1.8×厚0.3cm)から題箋軸木簡の一部と推定されます。題箋軸木簡は紙の巻物の軸<sup>まきもの</sup>に用いる木で、長く突き出した部分に巻物の内容を記したものです。

調査区西側の土坑からは藁紐<sup>わらひも</sup>を通して束ねられた1,201枚の銭貨<sup>せんか</sup>が出土しました(表紙写真)。銭貨は約80～190枚の棒状(銭縞<sup>ぜにさし</sup>)のまとまりで折り曲げられ、2段に重ねられていました。銭貨

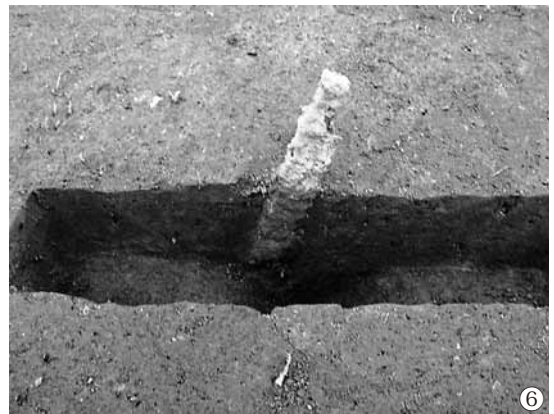


は47種類あり、中国(唐・宋・金・元・漢・明)で作られた渡来銭<sup>とらいせん</sup>と日本で造られた模倣銭<sup>もちゆうせん</sup>が混在しています。最古銭は唐の開元通寶<sup>かんげんつうほう</sup>(621年初鑄)、最新銭は明の永楽通寶<sup>えいらくつうほう</sup>(1408年初鑄)です。これらの銭貨は日本では中世に流通したもので、埋納された時期は15世紀以降になります。昭和50年には今回の出土地点から北東に約90m離れた香取神社脇の北側斜面で道路拡幅工事中に約360枚の銭貨が出土しています。今回の出土銭との関連が考えられますが、確認された最新銭は北宋の政和通寶<sup>せいわつうほう</sup>(1111年初鑄)で、埋納された年代には差があると推定されます。調査区南側では柱穴様ピットにほぼ垂直に埋設された刀子<sup>とうす</sup>(⑥)が出土しました。また、遺跡内には柱穴様ピットの底に中世の銭貨が残置されているものが4例確認されています。いずれも建物の地鎮<sup>じちん</sup>や廢絶の儀礼にかかわるもののでしょうか。



このほかに中世に属すると考えられる出土遺物は中国製の白磁皿<sup>はくじ</sup>や青磁碗<sup>せいじ</sup>、珠洲系陶器<sup>すず</sup>、瀬戸、信楽などの中世陶器、銭貨<sup>とうす</sup>、刀子、釘などの金属製品です。集落内からは金属製品や鉄滓<sup>てつさい</sup>が多量に出土したことから鍛冶<sup>かじ</sup>が営まれていたと考えられます。

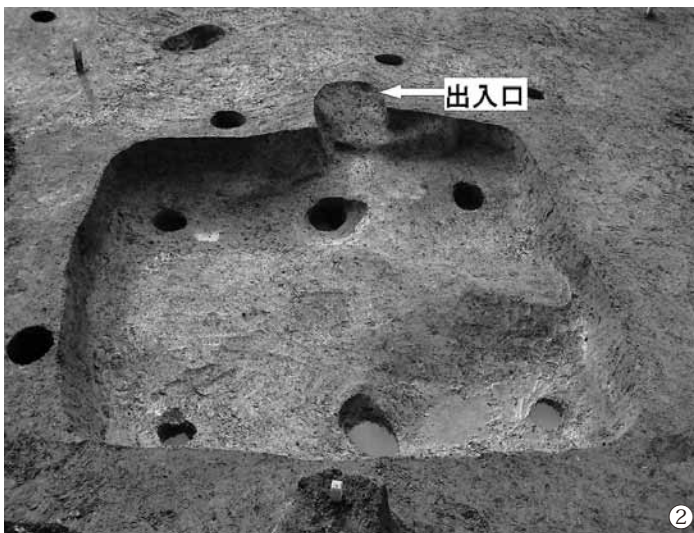
今回の調査で見つかった遺構や遺物から、遺跡は平安時代から室町時代まで継続的に利用された集落であったと考えられます。今後の整理作業では、丸鞆や木簡が出土した集落が古代の律令体制の中でどのような役割を担っていたのか。また、中世に流通した大量の銭貨がこの集落に埋められたことにどのような意味があるのかについて、周辺の遺跡やこれまでの発掘事例を参考にしながら検討していく予定です。



北檜岡中野遺跡はJR奥羽本線神宮寺駅より北西へ約4.3kmに位置し、遺跡の西方を北流する雄物川の河岸段丘上の標高19～20mに立地しています。遺跡の北側には雄物川の残存湖である長沼があり、南東には平成20年度に調査が行われ、江戸時代のかまど状遺構が発見された沖田Ⅱ遺跡があります。今回の調査は地形や調査工程などの関係から便宜上A区、B区、C区の3区に分けて行いました。

調査の結果、<sup>たてあな</sup>竪穴建物跡、<sup>ほったて</sup>掘立柱建物跡、かまど状遺構、井戸跡、<sup>しょうど</sup>焼土遺構、<sup>いこう</sup>土坑、<sup>どこう</sup>溝跡、<sup>ちゅうけつよう</sup>柱穴様ピットなどの遺構が見つかりました(①)。

出土した遺物は、縄文時代の土器、石器(石鏃)、平安時代の土師器、須恵器、中世の陶器、江戸時代の陶磁器などで、そのうち最も出土量が多いのは江戸時代の陶磁器でした。



竪穴建物跡(②)は約3.7m×約3mの方形で、深さは約0.3mです。底面には6つの柱穴跡があり、それらの直径は0.3～0.5m、深さは0.2～0.5mでした。検出した2棟の竪穴建物跡は、いずれも出入口と考えられる幅0.4～0.5mの張り出しを持っています。

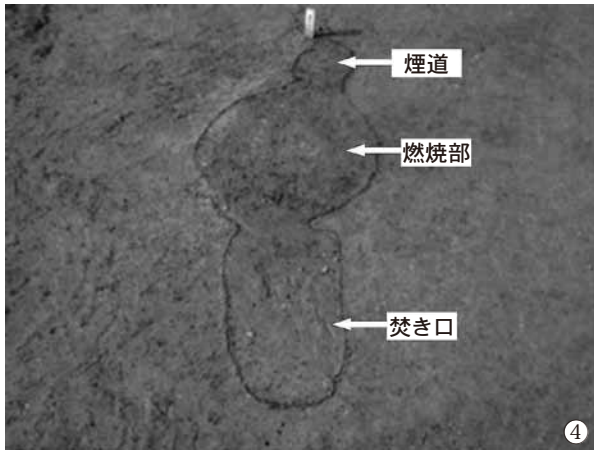
掘立柱建物跡(③)はB区遺構集中区の北辺から1棟見つかりました。規模は<sup>けたゆき</sup>桁行3間(7.2m)×<sup>はりゆき</sup>梁行1間(2.4m)で、それぞれの柱穴は直径20～30cm、深さ



は10～20cmでした。

かまど状遺構(④・⑤)は41基見つかりました。近年の土取りや耕作によって上部は削平されており、残存状況はあまり良くありませんでしたが、大きさは長軸0.8～2.2m、短軸0.5～1.2mです。これらは地下式のかまどで、<sup>たぐち</sup>焚き口と<sup>ねんしょうぶ</sup>燃焼部が地下に作られ、そこから<sup>えんどう</sup>煙道が地上に抜ける構造になっています。平面プランは<sup>えかみがた</sup>柄鏡形、楕円または不整楕円形などがあり、煙道が軸線に対して斜めに

に付くものもあります。遺構内に堆積した土層の観察から、使用時の底面に焼土と天井部である地山土が崩落している状況が確認できました。また、<sup>ひねつ</sup>被熱による硬化した面が底面及び壁面に認められないことから、高熱もしくは長期間の使用ではなかったことが想定されます。このかまど状遺構は、大仙市神岡地区に多く見られる遺構で、<sup>おざわ</sup>小沢遺跡、<sup>ぼらの</sup>茨野遺跡、<sup>やくし</sup>薬師遺跡、<sup>おきた</sup>沖田Ⅰ遺跡、沖田Ⅱ遺跡など



からも見つっています。また、遺構の周囲には柱穴が認められないことから上屋はなかったものと考えられます。遺構の中からは遺物が出土しないため、詳しい時期や、どのような用途であったのかは定かではありませんが、狭い<sup>びこうち</sup>微高地に密集して作られているのが特徴的です。

井戸跡(⑥)は素掘りで造られており、直径は0.7～1.8m、深さは0.6～1.3mです。遺物は出土しませんが、遺構内の堆積土中に焼土を含んでいることから、かまど状遺構と近い時期であると考えられます。

今回の調査では、いずれの遺構からも遺物は見つっていないため、現時点で各遺構の年代を確定するには至っていません。しかし、<sup>びこうち</sup>掘立柱建物跡、<sup>びこうち</sup>掘立柱建物跡、井戸跡などは、かまど状遺構とほとんど切り合うことなく近接しており、同時に存在していたものが多いと考えられます。堅穴建物跡の形態は中世に



特徴的なものであることから、かまど状遺構の時期も中世と推定できます。今後、整理作業を通じて、集中している遺構の総合的な分析と解釈、自然科学分析、周辺遺跡との比較などを行い、かまど状遺構を中心とした遺構群の時期、性格を明らかにしていきたいと思ひます。

茂木屋敷跡は、大館市の南東方、J R花輪線十二所駅から東約300mに位置する江戸時代の武家屋敷跡です。背後には東西約1 km、南北約500mの範囲にわたり、いくつかの広大な台地がありますが、これらの台地が十二所城跡です。遺跡は米代川左岸の標高約86mの沖積地上に立地します。遺跡の下は泥炭層となっており、当地で生活が営まれる以前は湿地帯が広がっていたと考えられます。

一国一城令により、元和6（1620）年に十二所城は破却され、同地に「再来館」が建造されました。その後、貞享5（1688）年、十二所所預茂木知恒が「再来館」を北側城下町の一画に移しました。今回調査したのは、その茂木氏の居館があったとされる場所です。この度、十二所公民館改築に係る1,300㎡を、平成21・22年の2か年にかけて発掘調査しました。調査地は旧成章小学校跡地にあたり、調査区中央は校舎解体の際の攪乱を受けていたため、遺跡の保存状態があまり良くないのではないかと懸念されました。ところが、校舎造成の際、大部分が厚く盛土されていたため、掘立柱建物跡などの遺構が良好に残っていました（①）。また、調査中は、降雨のたびに背後の台地からの出水に悩まされましたが、その水のお陰で、多量の木材と木質遺物が腐らずに現在まで残っていました。

基本土層は、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：暗オリーブ褐色土（校舎造成の盛土）、Ⅲ層：にぶい黄色土と黒褐色土、Ⅳ層：黒色土、Ⅴ層：黒褐色土、Ⅵ層：黒褐色土と暗灰黄色土、Ⅶ層：黒色土、Ⅷ層：黒色土、Ⅸ層：黄灰色土となっています。Ⅲ層とⅣ層からは江戸時代の陶磁器が出土し、当時の生活面と考えられます。Ⅲ層は何枚かの薄い層からなり、幾度か屋敷が建替えられ、整地されたものと考えられます。また、Ⅴ層とⅥ層はシラスを主体とする薄い層が何枚も重なっており、湿地帯であった場所を埋め立て、整地したことがうかがえます。Ⅶ層とⅧ層は泥炭層です。Ⅸ層は非常に固くしまったシラス層で、十和田火山の火砕流二次堆積層とみられます。井戸の調査中に、本層の中から倒木が2本重なった状態で見つかりました（②）。これは数回にわたり噴火



している十和田火山の火砕流のすごさを傍証しているものと言えましょう。

調査の結果、江戸時代中頃から幕末を中心とする屋敷の遺跡であることが分かりました。遺構は礎石建物跡1棟、掘立柱建物跡15棟、井戸跡3基、塀跡、門跡、土坑、溝などが見つかりました。また、調査区東側では大溝が3条確認されました。このうち平行する2条の溝は南北



に調査区外に広がり、当時の道路跡と考えられます。調査区北西側で見つかった掘立柱建物跡S B 232は長さが8 mの建物跡で、東側に長さ8 m以上にわたる回廊状施設が附属するようです(③)。



S B 232の西側にあるS B 600は長さ11mの建物跡で柱穴からは木柱の根もと部分が見つかりました(④)。S B 232南東のS B 3の柱穴内からは漆器椀蓋が出土しました(⑤)。



柱痕跡の周りにあったことから、建物を構築する際に、地鎮などの理由で埋納されたものと考えられます。井戸は建物の近くから3基見つかりました。井戸側を持つものは1基だけで、ほかは抜き取られていたためか見つかりませんでした。



出土遺物は肥前(現在の佐賀県と長崎県の一部)産陶磁器が多く、当時高価であった肥前産青磁が約120片出土し、屋敷を造営した茂木氏の社会的地位の高さがうかがえます。陶磁器はほかに京焼、瀬戸美濃産などが出土し、近代のものに白岩系の陶器もあります。そのほか土製品(貝風呂、土鈴、レンガ)、土器(かわらけ)、石製品(焜炉、硯、砥石)、銭貨(寛永通寶)、木製品(下駄、漆器椀、羽子板、箸)が出土しました。

江戸時代後期の「十二所絵図」に茂木筑後屋敷と見えますが、周辺の施設や道をもとに現在の場所に当てはめると今回の調査区がすっぽりと収まる広大な

屋敷を構えていたことがうかがえます。今回はその中央やや西寄りの北半分を調査したことになります。茂木氏の屋敷に関する詳しい絵図は残されていないため、今回の調査成果を検討することで、その一端を明らかにすることができる可能性があります。ところで、当時の風景を表す史料として興味深いものがあります。それは、明治時代に全国を周遊し、各地の風景、風俗を描いた菫山山人(本名・土岐源吾)が描いた十二所の絵です。そのうちの一枚が茂木氏の屋敷が建っていた場所を描いている可能性があります。山人は明治22(1889)年ころ、十二所を訪れ、茂木知端とも面会しています。

秋田市では、藩校明德館跡や東根小屋町遺跡、古川堀反町遺跡など大規模な調査が行われていますが、県北部で江戸時代の遺跡をこれほどの規模で発掘調査したのは初めてのことです。当遺跡の調査が、茂木氏の解明につながることを期待されます。

(大館市教育委員会)

# 秋田県甘肅省文化交流事業

秋田県と中国甘肅省は昭和57（1982）年に友好提携を締結して以来、様々な分野で交流を進めてきました。その中で、文化交流を通して幅広い視野をもった人材を育成することを目的とし、平成13年度から平成22年度までの10年間継続して行われてきたのが、秋田県甘肅省文化交流事業です。毎年、文化交流員として相互に職員を2名ずつ派遣し、7か月間（平成21年度からは3か月間）、文化財に関する研修や日常生活を通じて交流を深めてきました。10年の節目を迎えたこの事業の取組みと成果について、振り返ってみたいと思います。

秋田県からはこれまで、埋蔵文化財センターや県立博物館等の職員17名を交流員として派遣してきました。派遣先の甘肅省は中国西北部、かつてのシルクロード上に位置しており、これに関連した遺跡も数多く分布しています。特に莫高窟や陽関のある敦煌は日本でも有名です。また、内陸部の乾燥地帯であるため、日本の遺跡では残りにくい木製品や絹製品なども、良好に保存されており、とても魅力のある地域です。秋田県交流員は、甘肅省博物館や省内外の資料館、あるいは甘肅省文物考古研究所が実施している発掘調査中の遺跡などの視察を通じて、中国の文化財の豊富さ、幅の広さを知り、専門分野での知見を広めることができました。また、アパート住まいをした蘭州市内や研修先では土地の人々との交流を深めることもできました。



未盗掘で発見された磨嘴子遺跡の漢墓（2003）



合同発掘調査のメンバー（2003）



黄河沿いに開けた甘肅省の省都蘭州（2008）



農村で出会った子どもたち（2002）

中国の文化財の豊富さ、幅の広さを知り、専門分野での知見を広めることができました。また、アパート住まいをした蘭州市内や研修先では土地の人々との交流を深めることもできました。

研修と交流の最も良い機会となったのは、平成15年度から平成17年度に甘肅省武威市にある磨嘴子遺跡で行われた、県と省との合同発掘調査です。磨嘴子遺跡は漢代の墓地として知られており、1970年代に甘肅省博物館によって発掘調査が行われていました。この時の出土品のうち4点が中国の国宝に指定されています。

合同発掘調査は、今後の磨嘴子遺跡の保護に役立てるために、遺跡の全容を把握することを目的として行われました。中国では、外国人が国内の遺跡調査を行うことが厳しく制限されています。日本の地方自治体が中国政府の正式な許可を得て発掘調査を実施できたのはこれが初めてで、県省の永年にわたる友好交流が

あったからこそ成し得た快挙です。

秋田県交流員が参加した延べ159日間の調査では、広大な遺跡全体の地形図が初めて作成されたほか、未盗掘のものを含めて31基の漢代の土洞墓（地下式横穴墓）が調査されました。また、新石器時代にも墓地や生活の場所として使われていたことが明らかになり、中国考古学にとっても大きな成果を挙げることができました。秋田県交流員にとっては考古学という専門分野での知見を広めたことだけでなく、中国の人と寝食を共にし、意見交換をしながらひとつの目的を共同で達成するという経験も、大きな成果となりました。

甘粛省から秋田県を訪れた交流員は、10年間で20名にのぼります。埋蔵文化財センターや県立博物館での日常業務、県内外の博物館施設や遺跡の視察など、文化財に関連する様々



磨嘴子遺跡で発見された新石器時代の土坑墓群（2004）

な研修を行いました。

ほとんどの人が初めての訪日ということもあり、目にするもの、耳にすることを全て吸収しようと、熱心に研修を受ける姿が印象的でした。

このような研修以外に、県民と直接触れ合う機会として、学校や公民館での交流会が行われました。10年間で延べ約100か所で行われた交流会では、交流員が写真を使って甘粛省の文化財



埋蔵文化財センターでの研修（2005）

や、町の様子を紹介するだけではなく、一緒に中国の家庭料理を作る、中国の遊びをやってみる、簡単な中国語であいさつを交わしてみるなどの体験を通じた交流が行われ、参加者が中国を身近に感じることでできる良い機会となりました。

こうした文化交流を通して、私たちは秋田県と甘粛省のあるいは日本と中国の共通点や相違点を数多く発見することができました。また、両国の文化、歴史的なつながりの深さを改めて認識し、互いを尊重しあえる人間関係を築く



交流会で中国式じゃんけんを楽しむ子どもたち（2010、花館小学校）

ことができました。10年間にわたる文化交流の最大の成果は、こうしたたくさんの人的交流ができたことではないでしょうか。このつながりを大切に、今後は情報交換を中心とした交流を更に進めていきます。また、秋田県教育委員会では、これまでの交流の成果を報告する記念展などの開催を予定していますので、ぜひご期待ください。



文化交流についての協議書に署名する根岸教育長（2009）

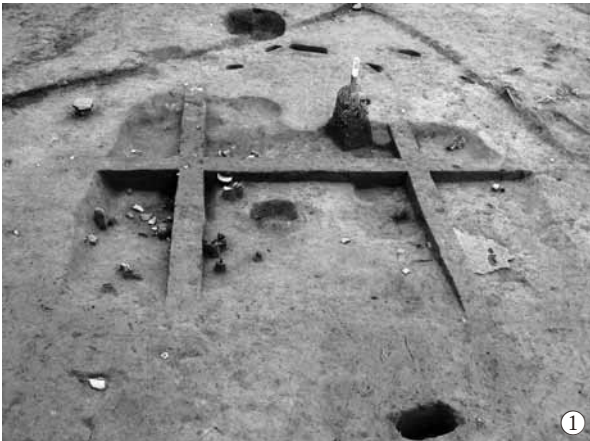


合同発掘調査による出土品の撮影（2010）

前田表遺跡は、JR羽越本線仁賀保駅より北東へ約1.3km、にかほ市両前寺地区の国道7号線東側に隣接する標高41～48mの丘陵地（仁賀保高原北西端）に立地します。この丘陵地は両前寺川と阿部堂川によって断ち切られており、遺跡の南側には隣接して家ノ浦遺跡、南側の低地部には家ノ浦Ⅱ遺跡、両前寺川をはさんで南向かいには横枕遺跡、国道をはさんだ低地部には前田表Ⅱ遺跡と立沢遺跡があります。また、遺跡の東側には隣接して中世城館の安倍館跡があり、西側約0.8kmには日本海が広がっています。

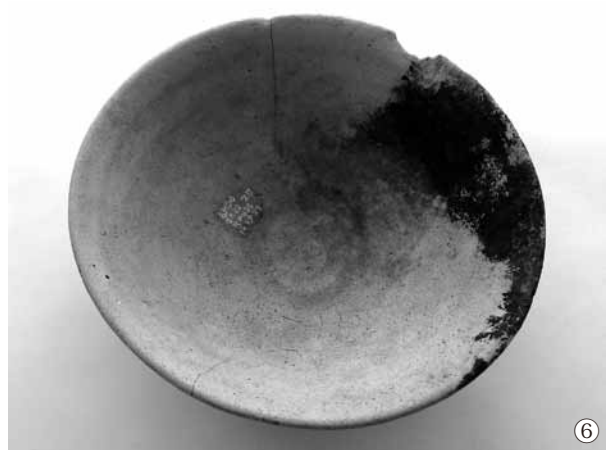
調査の結果、平安時代の竪穴建物跡、土坑、焼土遺構、集石遺構、柱穴様ピットが見つかりました。出土した遺物は平安時代の須恵器、土師器、四耳壺などで、そのうち最も多いのは土師器でした。

調査区東側の傾斜地では、竪穴建物跡が重複して2棟見つかりました（①）。長軸約3.11m、短軸約1.87m、深さ約47cmの長形状の竪穴建物跡からは、焼土とともにたくさんの土師器と炭が出土しました（②）。また、掘り込みの底面で土器焼成に関わる粘土が見つかったことから、土師器生産の工房跡であった可能性が考えられます。周囲には柱穴のあとが残り、上屋をかけて雨風を防いだものと思われます。



土坑は調査区北側に1基、東側に3基の計4基で、長軸約0.86～1.70m、短軸約0.67～1.43m、深さ約12～35cmでした。長軸約86cm、短軸約67cm、深さ約12cmの土坑（③）と長軸約1.33m、短軸約0.86m、深さ約35cmの土坑（④）からは被熱した礫とともに土師器の坏や甕が出土しました。また、長軸約1.70m、短軸約1.43m、深さ約32cmの土坑（⑤）から出土した坏にはタール状の黒い





付着物が認められ、灯明具の器に転用された後に埋納された可能性が考えられます (⑥)。

焼土遺構は調査区北側に2基、東側に3基、南側に2基の計7基で、長軸約0.70～1.88m、短軸約0.50～1.58m、深さ約10～17cmでした。長軸約83cm、短軸約71cm、深さ約11cmの焼土遺構からは被熱した礫とともに土師器の坏や甕 (⑦) が出土しました。この土師器甕の胴部には「\*」の印の線刻が施されていました。



調査区西端の最も見晴らしのよい頂部付近では集石遺構が見つかりました (⑧)。集石遺構からは約1,800個を数える石とともに12世紀ごろの四耳壺が出土したことから、経塚であった可能性が考えられます。石は長径5～25cmの扁平な川原石で、地表面を覆うように積み上げられていました。四耳壺は肩部の4か所に耳を付した珠洲系陶器の壺で、器高は約25cm、胴上部に振幅の大きい流麗な櫛目波状文を4ないし5帯めぐらしています (⑨)。



今回調査の対象になった丘陵地の尾根部一帯は、平安時代には土師器生産を行う場として、その末期には宗教的な空間として利用されていたことが分かりました。前田表遺跡の南側には古代の集落跡である家ノ浦遺跡や立沢遺跡などがあり、これら周辺遺跡との関連を解明していくことにより、にかほ地区の平安時代の様相がより明らかになると考えられます。

# 横枕遺跡 (第1次調査)

ひらさわあざよこまくら  
にかほ市平沢字横枕

横枕遺跡は、J R羽越本線仁賀保駅の東約0.8kmに位置し、国道7号線東隣の丘陵西斜面の畑地に広がっています。北側を両前寺川<sup>りょうぜんじ</sup>、南側を琴浦川<sup>ことうら</sup>にそれぞれ区画されていて、遺跡の標高はおよそ22～40mです。遺跡は30,000㎡以上にわたって広がっていると推定されますが、今回は両前寺川寄りの遺跡北側部分6,200㎡を調査しました。

調査の結果、丘陵斜面のうちで傾斜が比較的緩やかな場所4か所で平安時代中ごろの<sup>たてあな</sup>竪穴建物跡や土坑<sup>どこう</sup>などが見つかри、当時の集落があったことが分かりました。

竪穴建物跡は全部で6棟見つかりました。そのうちの3棟はそれぞれ1棟だけが丘陵の緩斜面に点在していて、残りの3棟は今回の調査区が一番高い所にまとまっています。建物跡の様子が最も良く分かったものでは、竪穴の形は幅約5.6m、長さ3.8m以上の四角形で、竪穴周囲には壁板を立てるための溝と考えられる<sup>へきこう</sup>壁溝が巡っています(①)。そして、北東向きの壁の中央寄りにカマドが作られていました(②)。また、竪穴床面や壁溝からはたくさんの土師器<sup>はじき</sup>の破片や炭が見つかりました(③)。建物の屋根や壁を取り壊した後に土師器などをわざと捨てて、さらに火をつけたようです。建物から立ち去る時のある種の儀式と言えるかもしれません。そのほかの竪穴建物跡はカマドや炉は見つかったものの、竪穴自体の形はあまり良く分かりませんでした。



①

れていた(②)。また、竪穴床面や壁溝からはたくさんの土師器<sup>はじき</sup>の破片や炭が見つかりました(③)。建物の屋根や壁を取り壊した後に土師器などをわざと捨てて、さらに火をつけたようです。建物から立ち去る時のある種の儀式と言えるかもしれません。そのほかの竪穴建物跡はカマドや炉は見つかったものの、竪穴自体の形はあまり良く分かりませんでした。



②



③

このほか、最も高い所で見つかった3棟の竪穴建物跡の内側やその周辺では、床面や周囲の地面で盛んに火を焚いた炉跡もしくは焼土遺構がま  
とまって見つかっています(④)。これらの  
多くは、おそらく鍛冶作業を行うためのもの  
だったと推測され、周囲の竪穴建物跡もこの  
ような作業を行うためのいわば工房の跡であ  
ったと考えられます。



このほかに、これらの竪穴建物跡のある場  
所からはかなり離れた場所2か所で、地面に  
穴を掘って土師器を埋めた土器埋設遺構がそ  
れぞれ1基ずつ見つかっています。1基は、  
土師器の甕の中に坏2個を重ねて納めていま

す(⑤)。もう1基は坏1個を穴に埋めています(⑥)。いずれも実用的なものとは考えにくく、地  
鎮などのためのまじないとして埋められたのかもしれませんが。



今回の調査では、平安時代中ごろの遺構、  
遺物のほかは、縄文土器や石器、近世以降  
の土坑や溝跡などがごくわずかしか見つか  
っていません。横枕遺跡の今回の調査区で  
は、平安時代中ごろに人々が移り住んでき  
て、鍛冶をしたりして最も盛んに活動して  
います。ただし、もともと丘陵斜面で広い  
平らな場所がほとんどないせいもあって  
か、同時にたくさんの住居が建ち並ぶよう  
なことはなく、一時に何十人もの大勢の人  
が集まるようなこともなかったようです。



横枕遺跡の周辺には、家ノ浦遺跡や前田表  
遺跡、あるいは立沢遺跡などの同時代の遺  
跡が密集しています。これらの周辺の遺跡  
も含めて全体がひとつの村となっていて、  
横枕遺跡は鍛冶などの特別の作業をする人  
などが住んだ場所だったのかもしれませ  
ん。今後、周辺遺跡の調査結果も合わせて、  
横枕遺跡の性格を考える必要があるでしょ  
う。

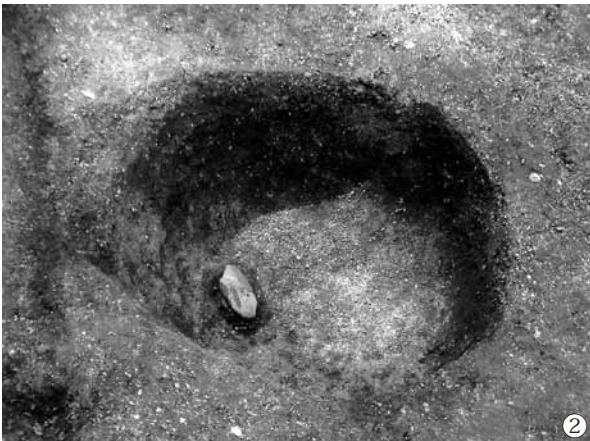
月見堂館跡は、JR田沢湖線角館駅から西へ約3.3kmに位置し、遺跡北東の太平山たいへいざんから流れる入見内川いりみの右岸段丘上の標高60～120mに立地しています。遺跡の南側には同じく中世城館の田中館跡たなかだてあとが隣接しています。また、入見内川の下流約2kmには水平城跡みずひらじょう、さらに約3kmには楯館跡ならだてあとという中世城館跡があり、月見堂館跡との関連がうかがわれます。今回の調査は国道46号バイパス建設のための、館たての北端部の東側緩傾斜面が対象です。この部分の標高は60～67mです。



調査の結果、土坑どこう、配石遺構はいせきいこう、竪穴建物跡たてあなたてものあと、掘立柱建物跡ほったてぼしらたてものあと、かまど状遺構かまどじょう、溝跡ちゆうけつよう、柱穴様ピットなどを検出しました。

出土した遺物は、縄文時代（前期、後期）の土器、石器、中世の陶器、江戸時代の陶磁器などで、そのうち最も出土量が多いのは縄文時代の土器でした。

縄文時代の遺構と考えられるものに、土坑（②）と配石遺構（③）があります。土坑は平面形が楕



円形で、大きさは長軸92cm、短軸78cm、深さ35cmです。底面付近から凹石が出土しました。

配石遺構は長軸1.1m、短軸0.3mの長楕円形の範囲に20～25cmの扁平な石を5つ並べています。この配石の下には土坑などの掘り込みはありませんでした。これらの遺構からは土器が出土しませんでした。遺跡内からは縄文時代前期と後期の土器が見つまっていることから、このいずれかの時期であると考えられます。



竪穴建物跡(④)は調査区南端の埋没した沢に隣接して1棟検出しました。残存状況はあまり良くありませんでしたが、柱穴と壁溝の一部が見つかりました。それぞれの柱穴の大きさは直径40～50cm、深さは20～30cm、柱穴間の距離は2.3～2.4mです。周辺から珠洲系陶器が出土しており、中世に造られたものと考えられます。

掘立柱建物跡(⑤)は調査区中央から1棟見つかりました。規模は桁行3間(7.2m)×梁行1間(1.2m)であり、それぞれの柱穴は直径約30cm、深さ20～40cmでした。その周囲からは、ほかにも柱穴様ピットを検出しており、さらに別の掘立柱建物跡がある可能性があります。

かまど状遺構(⑥)は掘立柱建物跡の北側の斜面肩部から2基並んで見つかりました。どちらも平面形は楕円形で、長軸約1.2m、短軸約0.8mでした。かまどの天井及び壁のほとんどは崩落していましたが、壁の下部と底面は被熱によって硬化しており、底面からは炭化物が採取できました。現在この炭化物は年代及び樹種を調べるために科学分析を行っており、時期、用途等を考える上での手がかりになります。



今回の調査区は月見堂館跡の中でも最も低い部分にあたります。また、柱穴様ピットは南側の調査

区外へと続いていくことから、館の本体は南東の山地にあると思われます。今回の調査では、明確に館跡と関連した遺構を検出することはできませんでしたが、今後、整理作業の中で、それぞれの遺構を分析、検討し、ほかの中世の城館跡や遺跡から見つまっている遺構と比較することで、建物跡の復元などを行って遺構の時期や性格を解明していきたいと思えます。



今年度は第141次調査として、<sup>ながもり</sup>長森丘陵の南側に復元されている、古代の河川跡北西側の遺構分布状況を確認することと、昨年度実施した第139次調査B区で検出した<sup>もりどせいち</sup>盛土整地及び、丘陵裾部の平坦面の広がりを確認するために調査を実施しました。今回の調査区の標高は33m弱で、第139次B区から100mほど南側に位置し、<sup>はんらんげん</sup>電気探査により河川の氾濫原（河川敷）の広がり予測された北辺付近にあたっています（①）。

調査の結果、<sup>びこうち</sup>長森丘陵の裾部に広がる<sup>せいこうち</sup>微高地と、その南側を<sup>しんじく</sup>浸食した河川敷の境界を確認し、河川敷には南西流する複数の河川跡が見つかりました。

調査区東側では、一定の平場をつくる<sup>せいがいしよく</sup>青灰色粘土層の上面に、火山灰の塊が一面に広がる状況を確認できました。より南側の範囲では、河川により平坦地が浸食されて火山灰も流失し、青灰色粘土層の<sup>でこぼこ</sup>上面が凹凸した<sup>ふせいごう</sup>不整合となっている状況を確認できました。この粘土層中には遺物が含まれることから、火山灰が降る前に、<sup>こうずいたいせきぶつ</sup>上流側から運ばれた洪水堆積物（河川により運ばれ堆積した地層）であることがわかりますが、この地層は長森丘陵北側や史跡南東側に隣接する<sup>まいし</sup>祭祀遺跡（<sup>さいし</sup>払田柵の<sup>さいし</sup>祭場）である、<sup>くりや やち</sup>厨川谷地遺跡でも確認されています。またこの地層の下で見つかった灰色粘土層の中にも遺物が含まれており、この地層も同様に払田柵が造られた9世紀初頭以降の地層であると考えられます。さらにこの灰色粘土層の下には粗い砂が混じった黒色土の地層が確認できたことから、初めはこの付近にあった川の流れが、時期を経てだんだんと南の方へ移っていったことがわかりました。



調査区西側でも基本的には青灰色粘土層の上面に散布する火山灰と、同様に河川により浸食された状況が確認できましたが、ここでは火山灰が地層の中で10cm程度の幅を持って拡散しており、面的な分布が薄くなる傾向が確認できました。調査区西側は東側に比べて標高が低いうえに地下水が湧き出るところも多く、火山灰より下の地層中には大型の植物片が多く包含され泥炭質となっています。このことから調査区西側は水の流れがほとんど無い入り江や水溜まり、湿地帯のような状態であったと想定されます。また調査区西側でも南端部の旧宅地周辺だけは、表土の直下で青灰色の粘土層が削られており、河川の影響を受けなかった、もともとは中州の様な島状の微高地であったことがわかりました。

払田柵跡の沖積地部（丘陵周囲の水田地帯）については、長森南側の大路周辺と北側の北門、外郭材木塀周辺の様子が調査されているだけで、多くの範囲は手つかずの状態となっています。しかし史跡の南東側に隣接する厨川谷地遺跡の調査により、河川が蛇行するような沖積地部にも、払田柵が直接関連した（使用した）エリアが広がるということが明らかになっています。また長森南東側でのほ場整備の際に実施した用排水路、農道部分の発掘調査の結果、複数の河川跡にはさまれた微高地や湧水点で小規模な祭祀場が確認され、外柵と門くらいしか明らかになっていなかった低湿な沖積地部についても、当時の様子が少しずつ明らかになってきています。

第141調査の成果として、正面の南大路に復元されている河川跡が、915年と考えられる火山灰降灰までにかき、長森丘陵裾部から少しずつ南へ変遷していくとともに、河川により運搬された土砂が50cm以上にわたり河川敷内を北側から覆っていったことが確認できました。長森丘陵南側の沖積地部においては、北東側から河川が南西流することがわかっていたことがわかっていますが、地下水が湧き出る西側



調査区付近では、複数の小流路が関係してはいるものの、基本的には水の流れがほとんど無い湿地帯が広がっていたと考えられます。つまり長森丘陵南西側については、南西流する河川流路が9世紀前半代以降、氾濫を繰り返しながら南に移り、その北西側は広く湿地帯となっていたことが明らかとなりました。また調査区北辺部分を南限に火山灰がほぼ当時のままで一面に分布していることから、流水の影響を受けない平坦地が一定範囲に広がる可能性が想定できるようになりました。

今後はこの平坦面の北東側への広がりを確認し、外郭南門周辺の官衙域との関連を調査していくことが必要と考えています。

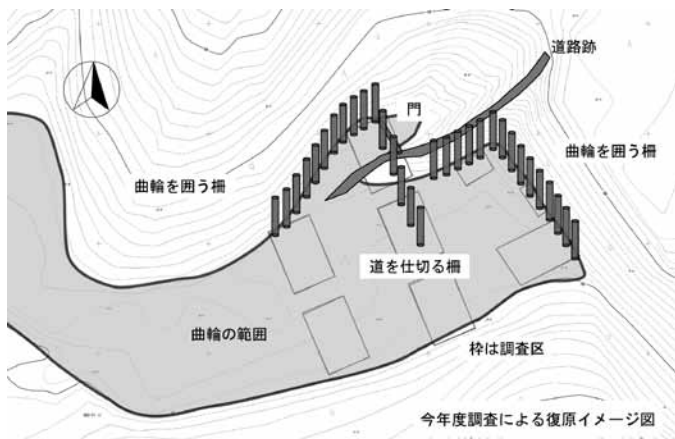
史跡脇本城跡は、男鹿半島の付け根、JR男鹿線脇本駅の南西に位置する中世の山城です。青森県北部から北海道南部までを支配していた豪族である安東氏との関係が伝えられ、天正5（1577）年、安東愛季が居城とし、大規模に修復した城であると言われています。廃城となったのは天正18（1590）年の豊臣秀吉による奥州仕置きか、慶長7（1602）年、佐竹義宣の秋田移封の時と考えられています。

当時の城跡を思わせる曲輪や土塁などの施設が非常に良く残っていることなどから、平成16年に国指定の史跡となりました。平成12年度から継続して発掘調査を行っており、平成22年度は第19次調査を行いました。調査は6月1日～10月12日までで、面積は約150㎡です。今回調査を行った曲輪には道路の跡が現在も観察でき、隠れた見どころの一つとなっています（①）。

今年度の調査で見つかった遺構は、柵の跡が4条、道路の跡が1条、門の跡が1条、柱の穴が88基などです。また、大規模に土を盛った跡や地面を平らにするために整地した痕跡が確認されました。出土した遺物は、中国産の陶磁器（青磁、白磁、染付）や国産の陶器（瀬戸焼、越前焼、珠洲焼）、釘などの金属製品や古銭など総計500点ほどです。

今年度の調査では、脇本城跡の城らしい一面が浮き彫りになりました。成果の概要は次の通りです。

- 1 道路跡は中世に曲輪と同時に造られ、曲輪と曲輪を結ぶための通路であったことがわかりました（②）。
- 2 道路と曲輪を仕切るように柵の跡が見つかり、さらに門があったことがわかりました（②、③）。
- 3 曲輪の北側と東側に柵がめぐっていたことがわかりました（③）。
- 4 今回調査した曲輪は防御的な役割を果たした可能性が高いことがわかりました。



平成23年度も発掘調査を行い、脇本城跡のさらなる解明を目指します。

また、「脇本城跡案内人」による無料のボランティアガイドも行っております。

詳しくは男鹿市教育委員会生涯学習課（TEL：0185-46-4110）までお問い合わせください。

（男鹿市教育委員会）

史跡秋田城跡は、秋田市西部の寺内地区を中心とする標高40～50mの通称高清水丘陵上に位置する奈良・平安時代の古代城柵の遺跡です。昭和14年に国の史跡に史跡指定され、国の直轄による調査を経たのち、昭和47年から秋田市教育委員会による保存管理のための発掘調査が継続して行われています。

9月から11月にかけて実施した第97次調査は、秋田城を取り囲む城壁に設けられた門のうち、最も重要であった外郭南門に取り付く道路の検出を目的として、外郭南門の推定地から南へ約100mの位置で調査を行いました。調査の結果、道路遺構3面、溝跡6条、溝状遺構群4群、竪穴住居跡1軒、小柱掘り方群2群、土坑5基、柱列1条、土手状遺構1基が検出されました。

調査地中央部から東部にかけて、やや硬く締まった土層からなる幅11.7m以上及び9.5m以上の道路整地層や、道路の西側を区画する道路側溝と考えられる南北方向の溝跡、道路造成の際に地業として掘り込まれた溝状遺構群からなる平安時代(9世紀)の道路遺構が2面検出され(①)、城外南大路の位置を初めて確認することができました。

なお、奈良時代の道路面は確認されていませんが、調査地東部および中央部から南北方向の道路を区画する道路側溝と考えられる奈良時代の溝跡が検出されました(②)。奈良時代の道路面については平安時代の道路を構築する際に削られてしまい、道路側溝だけが残っていたものと考えられます。

古代以外の遺構では、平安時代の道路側溝と考えられる溝跡と同じ位置で道路路肩の土留め施設と考えられる中世末期の柱列が検出されました。このことから、道路は古代のほかに中世末ごろにも利用されていた可能性も考えられます。

また、調査地西部では近世初頭の南北方向の道路遺構1面が検出され、この時期に道路の付け替えを伴う土地利用の変化があったことを確認しました。

今回の調査によって、城外南大路の存在と位置が初めて確認されたことで、道路の延長線上の調査地北方に外郭南門が存在することや、城内南北大路が存在することについても間接的に裏付けられました。また、調査地南西側で行った第93次調査で確認された東西道路とあわせて、方格地割と呼ばれる規則的な土地の区画が存在する可能性が高くなり、今後はそれらの詳細や周辺がどのように利用されていたのかを追求していく必要があります。

そのほか、縄文時代、奈良時代から平安時代、鎌倉時代から安土桃山時代、江戸時代などの遺構や遺物が発見され、調査地周辺が、秋田城の時代以外にも縄文時代から近世まで、長期にわたって生活の場として利用されていたことが確認されました。

(秋田市教育委員会)



沖田 I 遺跡は J R 奥羽本線神宮寺駅から北西へ約2.5km、標高約20～21mの河岸段丘上に立地しています。約2 km南側に雄物川が流れていて、周辺には平安時代の遺跡である布田谷地遺跡や新山遺跡、江戸時代の遺跡である沖田 II 遺跡などがあります (①)。この遺跡は平成19年度にも国道13号神宮寺バイパス建設事業に先立ち、今回の調査区の南側を、秋田県埋蔵文化財センターが調査してい



ますが、その調査では、9世紀後半から10世紀前半の平安時代の集落の一部であること、江戸時代の集落であることがわかっています。また、十和田湖が噴火した際(915)の火山灰が堆積する河道跡から、「寺」、「人」、「兄」などの文字が記された墨書土器が出土しました。

① 今回の調査でも、平安時代と江戸時代の遺構と遺物が見つかりましたが、今回の調査区で中心となるのは江戸時代で、掘立柱建物跡 (②)、土坑、井戸跡 (③)、かまど状遺構、河川跡、柱穴様ピットなどが見つかりました。出土した唐津焼や伊万里焼などの陶磁器の製作年代から、16世紀末から17世紀の前半ころが遺跡の全盛期であったと考えられます。遺構は、調査区を南北に流れていた旧河道の両岸に分布し、出土遺物は、唐津焼、伊万里焼、志野焼などの国産陶磁器、中国の漳州窯産などの輸入陶磁器、土師器、須恵器、墨書土器、木製品などがあります。旧河道の東側で見つかった井戸の中からは、南蛮人をモチーフにした17世紀初め頃の人形型水滴 (④) が出土しました。似たような出土品は県内では確認されておらず、仙台城跡や大阪府堺市でわずかに見つかっているだけです。水滴は高さ6.5cm、底幅4cm、美濃地方(岐阜県南部)が主産地の織部焼で、すずりに水を差す容器として使われたものです。



④ 沖田 I 遺跡は、かつて雄物川に注いでいた支流沿いにあること、一般集落からはあまり出土しない織部焼の水滴、唐津焼の花生けなどが出土していることから、16世紀末から17世紀の前半を全盛期とした河川交通による物資集散の場であったと考えられます。しかし、沖田 I 遺跡の最後は、沖田 I 遺跡から北西へ約600mにある沖田 II 遺跡の発掘調査報告で、「沖田 II 遺跡は、16世紀後半から18世紀前半に集落が存在し、その後突如集落を捨て、いずこかへ移り住んだと考える。その原因は、調査中でも柱穴底部に達する前に水脈に当たるとい水はけの悪さである。また、18世紀後半には、数度の洪水により東隣の神宮寺でも、この時期廃村に追い込まれた村がある。」と報告されていますが、沖田 I 遺跡も沖田 II 遺跡と同じような立地条件であること、また、遺構内に洪水時の粘土の堆積が見られることなどから、沖田 II 遺跡と同様であったと考えられます。

(大仙市教育委員会)

谷地中遺跡は、J R奥羽本線飯詰駅いづめから北北東へ約4 km離れた丸子川まるこ（六郷）扇状地よりさらに低地である標高31mに立地しています。周辺には平安時代の祭祀関連遺跡である八幡遺跡や平成22年度に発掘調査した湯殿屋敷遺跡ゆどのやしきをはじめとして、同時代の遺跡が見つっています。平成22年度に2,300㎡を発掘調査した結果、掘立柱建物跡、土坑、柱穴、旧河川跡を検出し、出土遺物から平安時代の遺跡であることが分かりました。

旧河川跡の北側では、掘立柱建物跡や土坑、柱穴が見つりました。掘立柱建物跡は、桁行2間×梁行2間はりゆきのもので、柱間寸法は9尺となっています（①）。柱穴の直径は約70cmであり、底面に礎板が敷かれ、柱の沈下を防ぐ手立てがなされています。また、ほかに同規模の掘立柱建物跡が1棟見つっています。掘立柱建物跡は重複して存在しており、少なくとも2時期にわたって使用されたことが分かりました。柱穴の中には小さな板が敷き詰められたものも見つっています（②）。



掘立柱建物跡は、旧河川跡からほぼ完形の土師器はじきつきや斎串いぐしなど祭祀行為を想定させる遺物が多量に出土していることや、調査区周辺地域に集落跡が見つっていないことなどから、儀式などを行うために建てられた家屋ではなかったかと考えられます。土坑は、自然にある落ち込みを利用しているために、掘り跡が明確でなく、掘り込みが緩いものが多く、薄い埋土の中に多量の土師器片が見つかる場合もありました。

旧河川跡は、調査区内を東から西側にかけて流れており、幅は13mありました。見つかった旧河川跡は盛土保存しましたが、断面図作成のため一部を底面まで掘って確認したところ、深さは約1.1mありました。覆土中からは、十和田a火山灰と思われる堆積物に加え、加工された板、斎串、木製の椀や皿はし、箸うしわん、棒状木製品、漆椀はけ、刷毛、ほぼ完全な形の土師器はじきつきが出土しました（③）。出土した土師器はじきつきには、文字が書かれた墨書土器ぼくしょどきも見つっています（④）。出土遺物から9世紀後半から10世紀前半ごろに営まれた遺跡と考えられます。



今後、これまで発掘調査を行った同時代の遺跡である八幡遺跡、根子荒田I遺跡ねこあらた、湯殿屋敷遺跡との比較を通じて、各遺跡の再検討が必要ではないかと思ひます。  
(美郷町教育委員会)

横手市では、後三年合戦関連遺跡群(金沢柵、沼柵、大鳥井山遺跡)を地域財産として活用するため、遺跡の内容を把握する調査を行っております。昨年2月に大鳥井山遺跡が前九年合戦・後三年合戦当時の具体的な内容がわかる遺跡として国史跡と評価されました。大鳥井山遺跡の立地などを考慮に入れ、金沢柵の場所を推定する上で類似する場所がないか踏査したところ、後三年の役金沢資料館裏の小高い山が大鳥井山遺跡と類似する構造であることがわかりました。このことから陣館遺跡として遺跡登録し、金沢柵の手がかりをつかむため、昨年度から測量調査を開始し、その測量成果をもとに頂上部平場の使われ方、斜面部の段状の地形の把握などにより、掘立柱建物跡や堀跡などの検出を目的として、今年度初めて発掘調査を行いました。調査区は遺跡の南東側を中心として、面調査部、斜面部、麓平坦部の3か所となります。調査面積は250㎡です。



面調査区では、柱穴200基以上、<sup>せいち じぎょう</sup>整地地業1地点が検出されました(①)。整地地業は山頂を平坦にする土木工事の跡です。柱穴の柱掘り方は隅丸方形で、その規模から掘立柱建物跡は3時期ほどの変遷が考えられそうです。



斜面部では、柱穴5基、堀跡1条、柱穴列1条、整地地業4地点が検出されました。目測で見える階段状の地形は、山斜面に平場を造る土木工事によって形成されたことがわかりました。特に斜面中段の盛土は1mの厚さがあります(②)。また、この中から11世紀中頃から後半と考えられるロクロ土師器(ろくろはじき)が出土しました。さらに、この土器の出土した下層より鉄鍋(てつなべ)が出土しました(③)。おそらく土木工事を<sup>じちん</sup>地鎮を行ったものでしょう。斜面下段では、幅4m、深さ1.2mの堀が確認され、その底には<sup>さかもぎ</sup>逆茂木の可能性のある柱穴が2基ありました。



麓平坦部では、4か所の試掘調査を行い、幅10m、深さ2.5m以上の落ち込みを検出しました。川岸からは9世紀代の土器が出土していることから、河川が埋没している可能性やそれを利用した堀の可能性もあります。

この調査において、陣館遺跡が後三年合戦の時代の遺跡であることがわかりました。今回初めて合戦の時代と合致する遺物が出土したため、金沢柵が金沢地区に存在する具体的な証拠が得られたこととなります。また遺跡内で合戦前後に大規模な土木工事が行われたことも判明したため、陣館遺跡が金沢柵の一部をなしている可能性も想定できるようになりました。

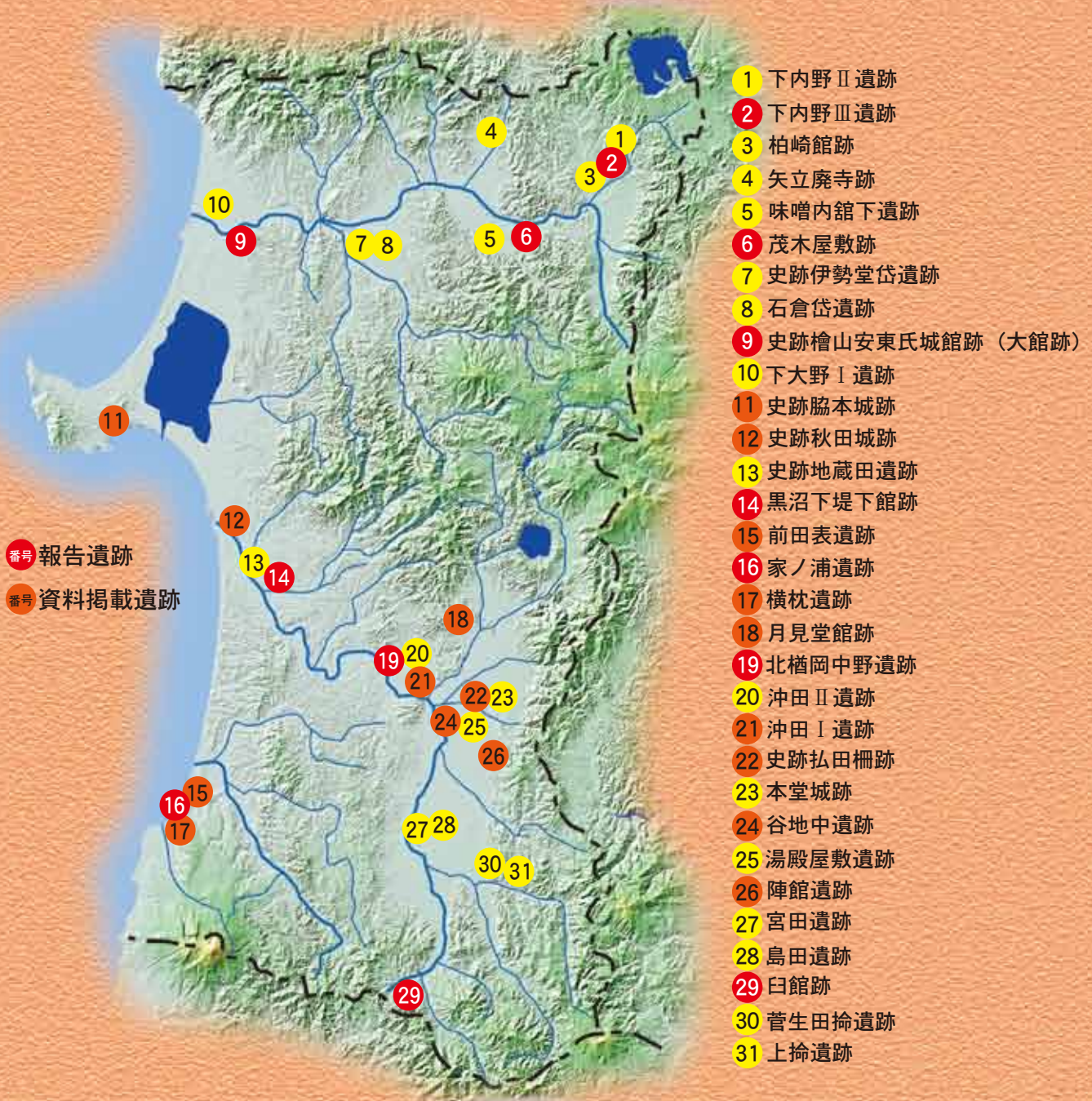
(横手市教育委員会)

# 年 表

年 代	時 代	県内の主な遺跡	秋田県の歴史	日本の歴史	
約3万年前	旧石器時代	縄手下(能代市) 鴨子台(能代市) 家の下(三種町) 風無台Ⅱ(秋田市) 風無台Ⅰ(秋田市) 小出Ⅳ(大仙市) 米ヶ森(大仙市)	秋田県に人が住みつき、ナイフ形石器や台形石器を使う。	日本列島に人が住みつき、石器を使った狩猟生活を行う。	
約1万2千年前 約9,000年前	草創期 早期	岩瀬(横手市) 根下戸道下(大館市) 坂下Ⅱ(大館市) ◎岩井堂洞窟(湯沢市)	大型の竪穴建物がつくられる。地方色豊かな円筒土器・大木式土器がつくられる。  大湯環状列石など大規模な共同墓地がつくられる。	土器作りがはじまる。狩猟生活が盛んになる。	
約6,000年前	前期	臼館跡(湯沢市) 池内(大館市) 上ノ山Ⅱ(大仙市) ◎杉沢台(能代市) 菅生田掬(東成瀬村)			
約5,000年前	中期	天戸森(鹿角市) ○萱刈沢貝塚(三種町) ○一丈木(美郷町) 烏野(能代市)			
約4,000年前	後期	●大湯環状列石(鹿角市) 高屋館跡(鹿角市) ◎伊勢堂岱(北秋田市) 下内野Ⅲ(鹿角市) 漆下(北秋田市)			関東で環状の貝塚がつくられる。
約3,000年前	晩期	白坂(北秋田市) ○矢石館(大館市) ○柏子所貝塚(能代市) ○湯出野(由利本荘市)			亀ヶ岡文化が栄える。九州で水田稲作がはじまる。
約2,300年前	弥生時代	◎地蔵田(秋田市) 館の上(三種町) 横長根A(男鹿市) はりま館(小坂町)	柵に囲まれたムラがつくられる。狩猟・採集を中心とする生活に稲作が加わる。	吉野ヶ里遺跡が営まれる。邪馬台国の卑弥呼が中国に使いを送る。	
西暦300年	古墳時代 飛鳥時代	寒川Ⅱ(能代市) 小谷地(男鹿市) 田久保下(横手市) 樋向(横手市)	北海道と同じ土器や土坑墓がつくられる。県内にも須恵器が持ちこまれる。	前方後円墳がつくられる。藤ノ木古墳がつくられる。	
710年	奈良時代	○岩野山古墳群(五城目町) ◎秋田城跡(秋田市) 竹原窯跡(横手市) 柏原古墳群(羽後町)	出羽国を置く。出羽柵を秋田高清水岡に遷す。雄勝城、由理柵がつくられる。	平城京に都を遷す。和同開珎がつくられる。東大寺の大仏がつくられる。	
794年	古代 平安時代	◎弘田柵跡(大仙市・美郷町) 胡桃館(北秋田市) ○横山(由利本荘市) 富ヶ沢A～C窯跡(横手市) 地蔵岱(北秋田市) ◎檜山安東氏城館跡(大館跡)(能代市) ◎大鳥井山(横手市) 黒沼下堤下館跡(秋田市) ○矢立廃寺(大館市) エヒバチ長根窯跡(能代市)	弘田柵がつくられる。  元慶の乱がおこる。	平安京に都を遷す。坂上田村麻呂、征夷大将軍となる。  平将門の乱がおこる。源氏物語・枕草子が書かれる。  平泉に奥州藤原氏が栄える。	
1192年	鎌倉時代	堂の下(三種町) ○大畑窯跡(大仙市) 北檜岡中野(大仙市)	鎌倉御家人が秋田に入る。	源頼朝が鎌倉幕府を開く。承久の乱がおこる。元寇がおこる。	
1338年	中世 室町時代	後城(秋田市) 洲崎(井川町) 家ノ浦(にかほ市)	北秋田で秋田安東氏と浅利氏の勢力がぶつかり合う。	足利尊氏が室町幕府を開く。足利義満が金閣寺を建てる。応仁の乱がおこる。	
1573年	世 安桃時代	◎脇本城跡(男鹿市) ○豊島館跡(秋田市) ○戸沢氏城館跡(仙北市) ○本堂城跡(美郷町) ○吉田城跡(横手市) ○西馬音内城跡(羽後町) ○山根館跡(にかほ市)	安東氏・小野寺氏・浅利氏・戸沢氏・六郷氏などが各地で戦う。安東氏、湊城を築く。	織田信長が安土城を築く。豊臣秀吉が天下を統一する。	
1603年	近世 江戸時代	久保田城跡(秋田市) 茂木屋敷跡(大館市) 藩校明德館跡(秋田市) ○白岩焼窯跡(仙北市) ◎平田篤胤の墓(秋田市) ◎由利海岸波除石垣(にかほ市)	佐竹義宣、常陸より秋田に転封される。	関ヶ原の戦いがおこる。徳川家康が江戸幕府を開く。	

太字は報告遺跡      ●国指定特別史跡      ◎国指定史跡      ○県指定史跡

# 発掘調査遺跡の位置図



平成22年度

## 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料

平成23年3月13日(日)

発行 秋田県教育委員会

編集 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地

電話 0187-69-3331 FAX 0187-69-3330

URL [http://www.pref.akita.jp/gakusyu/maibun\\_hp/index2.htm](http://www.pref.akita.jp/gakusyu/maibun_hp/index2.htm)  
 e-mail [maibun@pref.akita.lg.jp](mailto:maibun@pref.akita.lg.jp)